園長と語ろう

―できる事とできない事の間―

園長　家田　美里

むらさき新聞に何を書こうか、今月は何を伝えたいかなと考えた時に、まず初めに年長・年少児の事が思い浮かんできます。年長児は、年少の時に毎日涙を流しながら登園していた子が、トイレや着替えなど身の回りの事が一人ではできなかった子が、あんな事ができるようになりました、こんな事を言いました、と成長を伝えたくて仕方ありません。逆に年少児は、子育てが初めて、むらさきが初めての保護者の方に「安心して見守ってください」と伝えたいが為に、あんな事がありました、こんな事もあります、でも大丈夫ですよ、今が自分で乗り越えるチャンスだから見守ってください…と聴いてほしい事が沢山あります。

では、年中児はどうだろう?と考えてみると、今まで年中児にスポットを当てた事がありませんでした。今の年中児は?と言いますと、自分でできるようになった事が増えてきましたが年長児程はできません。かと思えば年少児みたいに全部大人に任せるという事もなく、少しはできるようになっている中途半端って言い方は良くないですね)いや、成長途中の子ども達です。私がもし担任をするなら、できる事・できない事の幅が広い年中児が一番難しいのでは!?と考えます。

先日、うんどうかいの種目を考えている時に大賀先生より相談を受けました。「そらのくみを見て、玉入れを同じ物でやりたいという声があがりました」という事です。私は子ども達からあがった声はできるだけ聴いてあげたいと思っていますが、流石にこれはどうだろう。年中児の力で上にあるカゴになかなか入らず、嫌になってしまう子どもが出てしまうのではないか!「とてもたいせつなものです」と伝え、(年長児は毎回、玉の数を数えて失くしていないか確認しています)その思いが伝わるのか!うーん無理だろうなと思いました。そこで大賀先生には「真剣に大切さを伝えてどうするかを相談してください」と伝えました。後日、ものくみ全員が担任と一緒に職員室に来ました。「うんどうかいでそらさんといっしょのたまいれがしたい」と一人が口火をきりました。みんなで話し合いをして、玉を失くさない方法を考えて私に言いに来たのです。話を聴いてみると、まず始めと終わりに玉の数を数える、玉が失くならないように自分達のイスや大型積み木で周りを囲う、という案でした。後で担任からはいろいろな意見が出ていた事を聞きました。"土で囲いを作る"や"担任を含め大人に壁になってもらう"など、子どもしか思いつかない、そしてすぐに玉が失くなってしまいそうな案や他人頼りの案です。「みんなでかんがえてたいせつにできることがわかりました。そらさんとおなじものをつかっていです。でもいちどちゃんとできるかやってみてください」と伝えました。うんどうかい前に試してみて、ももさんなりにオッケーだったみたいです。当日担任の「つぎはたまいれをします」の声掛けで全員がもものくみの方へ行きました。「玉入れなのに??」と思われた保護者の方もおられたのでは?実はその前にこんなやりとりがあっての行動でした。一生懸命に重いイスを運んで隙間なく囲いができました。やはり玉はカゴになかなか入らず、疲れてきた子はその囲いをイスにして座るという新しい使い方もでてきました。投げた玉が囲いの外に出る事もしばしば。その玉を拾わずに様子を見ていました。暫くすると必ず誰かが見つけて拾い、カゴ目がけて投げていました。玉入れに夢中になっていたからか、私との約束を守っていたのかは定かではありませんが、無事に玉を一つも失くさず終える事ができました。年長児みたいに赤白2チームに分かれて競う訳でもなく、年少児みたいに新聞ボールで満足する訳でもなく、一つのカゴで玉を全部入れる事に満足していた年中児でした。最初に無理だと思った私でしたが、子ども達はやり遂げてくれました。

まだ、できる事とできない事の中間にいる4歳達です。私達大人の接し方も難しいです。赤ちゃん扱いすれば怒られ、できるだろうと思って任せてみるととんでもない事になってしまったりと。一人一人をよく見て話を聴き、新しい事に挑戦したいという声を拾い、沢山の事にチャレンジしてほしいです。そして、できる事が増え自信を持つ事がまた次の挑戦に繋がります。これからもできる事が沢山増えていきますように見守っています。

